

飛鳥の三尊博仏

— 敦煌から竜門石窟の倚像 —

賀川光夫

はじめに

一九八〇年七月二一日、あこがれの敦煌莫高窟を林章教授とともに踏むことができた。敦煌莫高窟は、仏教の東漸において貴重な文書資料（敦煌文書）と、教変（絵画）をもった石窟寺院であつて、その開窟はさだかでない、前秦建元二年（三六六）沙門楽博の創建とも、永和九年（三五三）創建ともいわれる。石窟は五胡十六國時代造営の早期窟から元代窟にいたるまで総計四九二窟（一九七八年現在）である。アジア各地に点在する仏跡において、ミヤンマーのパガンは総計二千五百の建造物を数えるが記録ではアノアータ王¹による建寺開始は一〇四四年にはじまるとされるので、敦煌開窟より約六〇〇年の後代になる。寺院内部の壁画には仏伝や本生話など共通点が多いが大乗を主とする敦煌と、小乗による塔婆建設のパガンとは内容においても違いがみられる。

さて、敦煌においては、段文傑、史葦湘両教授の特別な厚意と劉永增資料部副主任の指導で、末公開の二一

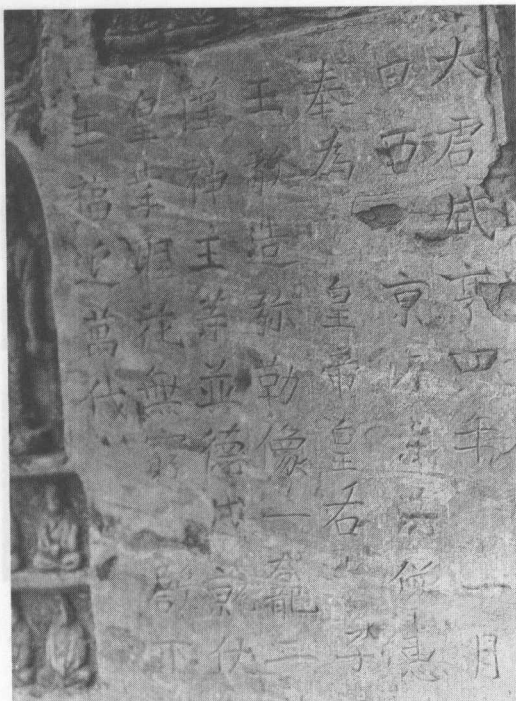


第1図 敦煌第215号窟(盛唐)前室 三尊博仏(日乾博)三叉蓮華

五号窟を見学することができた。二一五号窟は盛唐窟であり、前室左右の壁面に三尊形式の彫刻(第1図)をもつ日乾博仏があつた。三叉蓮華座からなる三尊形式の博仏で、その例は飛鳥白鳳期(七世紀、八世紀初頭)の彫刻と深い関係があるように考えられる。博仏と対比されるものとして銅板押出仏があるが、法隆寺大宝殿三尊仏、当麻寺奥院の三尊仏が同系統の三叉茎蓮華であり、博仏では三重県・名張市夏見廃寺や奈良県川原寺裏山の三尊仏にその形式の様子がうかがわれる。これら三尊仏主尊はいずれも倚像であり、倚像の展開についても注目されなければならぬ。こうした点を中心に、白鳳期奈良地方にみる共通の問題を観察、その伝播について若干の私論を展開してみることにした。

(一) 三尊仏にみる倚像について

倚像の姿勢をとる如来像は、北魏大同雲岡石窟初期の曇曜五窟、一九窟東西仏⁶にみられる。特に西脇洞は、外壁が崩落して露坐となり見学しやすい。雲岡石窟初期の曇曜五窟は、一般に皇帝を模した彫刻で漢北社会に例をみるものだとされ西方様式の影響と考えるが、北魏特有の威嚴を託した像である。一部には中国で「曹衣出水」といわれるマトウラ様式(一九窟如来立像)に似た如来などもみられ、更に碧眼鼻梁の高い像もあつて西方の影響が強いことをあらわしている。その中であつて一九窟西脇洞如来像は中国式法衣をつけていること、如来



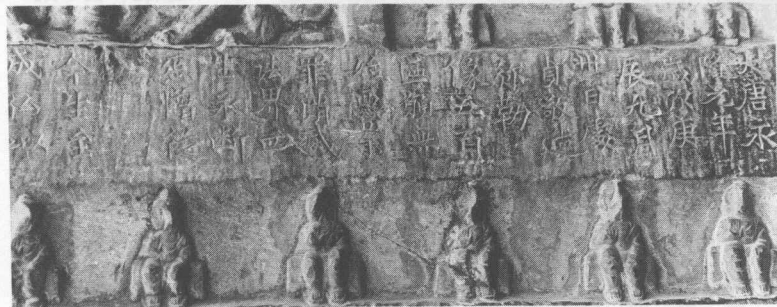
第2図 唐西京法海寺僧傳簡造弥勒像記

(洛陽竜門石窟惠簡洞 咸亨四年十一月七日)

来定印をなし、倚像の形式をとることで注目される。

一方敦煌莫高窟でも倚像は北魏時代に交脚像とともに多くの頭造をみる。

二五七窟(北魏魏⁷)では、窟中央の方柱円拱大龕主尊として倚像がみられるほか、二六〇窟(北魏中期)、四三二窟(北魏後期)、二四九(西魏)などに赤色大衣をまつて安置されている。これらの倚像は単に如来像として尊名を付していない。



第3図 唐處貞造弥勒像五百区造像記

(洛陽竜門石窟万仏洞、永隆元年九月三十日中央五尊形式の倚像は壺坂寺の独尊仏と同形式)

倚像が中原で

流行するのは北

魏の雲岡から竜

門初期の時代で

ある。題記の

多い洛陽竜門石

窟では、弥勒造

像記と倚像が同

時にみられる。⁽⁸⁾

惠簡洞では、西

京法海寺僧惠簡

による造像記が

あり、咸亨四年

(六七三)十一月

七日、銘第2図

には

大唐咸亨四年



第4図 倚坐独尊仏 (博仏)

向って左中国伝長安出土。右、壺坂寺出土 (同じもの宇佐虚空蔵出土)

十一月七日西京寺法僧惠簡奉為皇帝皇后太子周王敬造弥勒像一龕二菩薩神王等並德成就伏願皇帝聖無窮 殿下諸王福延万代
とあり、この造像記によつて本尊が弥勒であること、製作年代が咸亨四年(六七〇)であることがわかる。
次に造像題記と弥勒(倚像)に関するものに万仏洞入口左壁がある。その造像題記(第3図)は左の如くである。
大唐永隆元年歲次庚辰九月卅日處貞敬造弥勒像五百区願無始惡業罪消滅法界四生永断怨憎從今生至成仏以来普作菩提眷属誓相度脱逢善智識出家脩道永離盖纏晤無所得

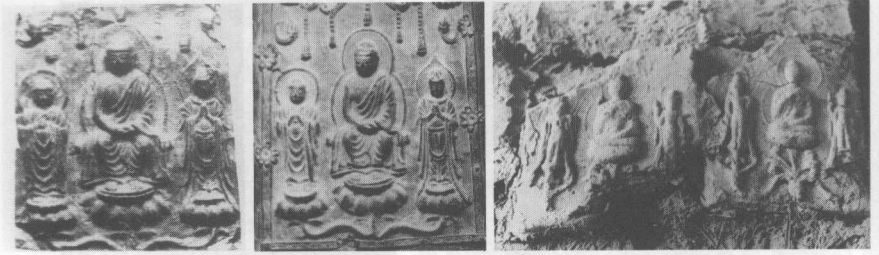
とあり、その題記の上に倚像である弥勒を中心として二菩薩、二比丘を左右に配置して五尊形式となし、周辺に多数の倚像がある。この造像記から、倚像のすべては弥勒であることが明かである。このように弥勒の造像記とその主尊に倚像をあてた例は少くない。尊名不祥の如来形として北魏代から雲岡や敦煌石窟にしばしば登場する倚像は、弥勒信仰にもとづくものとみてよい。

奈良県高市郡壺坂南法華寺¹⁰、大分県宇佐市虚空蔵寺(第4図)などで出土した小型独尊仏は同形の倚像で如来の定印をなしている。また倚座独尊の倚障がきわめて特徴的であり、その類似するものに、竜門古陽洞外、唐龕後屏や、京都市山科勸修寺繡帳如来像後屏がある。すなわち宜字形の台座上に倚障をつくり、上方に左右三つの弧形をあらわ

し、その先端が火炎宝珠形をつけ後屏となしている。

特殊な倚障は弥勒の台座に限られるのではないかとする見解もあり、北魏時代一つの形式をあらわしている。更に注目されるのは台坐の両翼にマカラと後脚で立つ獸形を配置していることである。先の竜門古陽堂外の唐龕、京都府観修寺繡張にも倚障に沿って左右にマカラと獸形が配置されている。古陽堂外唐龕の主尊は不名であるが、特徴ある倚障の共通性からみて弥勒像と考えてよい。

次に壺坂寺や虚空蔵寺の倚坐像は足を対面する獅子座中央の踏割蓮華に置く。倚障後屏、マカラと後脚で立つ獸形、対面する獅子座などが倚坐像を中心に図化された小形博仏そのものの原形に唐代の製作と推定される小形独尊倚像博仏(第4図左)がある。複弁の台座に左右二本の柱をたて、中央に獅子喰を飾る屋根があり、厨子状建物の中に如来と倚障(後屏)、対面獅子座と踏割蓮華などが描かれている。二柱を建て厨子形屋根中央の獅子喰から左右に飛天があらわされている点が壺坂寺や虚空蔵寺の小形独尊仏と違う点である。しかし、倚像とそれを取り巻く図形の一つ一つが符合する如く一致している点で、個定図像の原形と思われる。更に先にあげた竜門万仏堂入口の「大唐永隆元年唐貞造弥勒造五百像記」の題記上の五尊形式の主尊は後屏を省略してはいるが対面獅子や踏割蓮華をあらわし、倚像の形態もほぼ同じ形式のもとで造像されている。この倚像が弥勒であることは造像題記で明らかであり、これには製作年代を明記している。かりに竜門万仏洞の倚像が唐製作小形独尊倚像仏や壺坂寺や、虚空蔵寺博仏の原形とみると、その製作年代は永隆元年(六八〇)で、天武天皇九年にあたり、壺坂寺が完成した大宝三年(七〇三)まで二三年を数え、大宝三年建立の壺坂寺の博仏、独尊倚像の伝来とみて間違いなからう。このように倚像について、その尊名をあてるとすれば弥勒が有力となる。



第5図 三叉茎蓮華で連繋される三尊仏

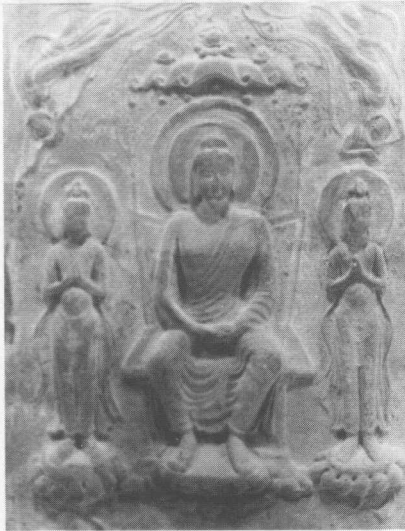
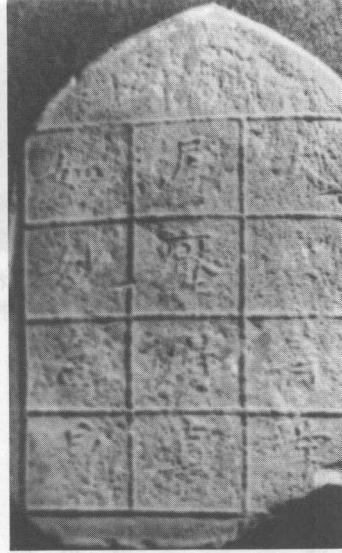
向って左から知恩院押出仏、法隆寺銅板三尊、敦煌三尊博仏

水野清一、長広敏雄両氏は、「釈迦から弥勒¹⁵」の項目のなかで「釈老志」にみえる「釈迦前有六仏 釈迦繼六仏而成道：将来有弥勒仏、方繼釈迦而降世」とあるのを引いて、北魏時代造像には弥勒をあてるものが多いとしている。更に北魏時代に出された經典目録『出三藏記集』から弥勒の名を題名にした仏典をあげ、弥勒下生説の流布されたことを指適している。長広敏雄氏の論文は、豊富な資料にもとずき、しかも実際に現地でも点検した貴重な学識によるもので敬服して引用させていただいた。この長広氏の見解を裏付けるものが竜門古陽堂の六十数種類の造像記と尊像の対比である。造像記の中で釈迦が二二、弥勒が二五で、四七記をしめ、阿弥陀の造像記は一例もない。竜門石窟で、阿弥陀如来が出現するのは唐代窟になってからであり、釈迦―弥勒信仰の色濃い時代に先の倚像の造像が流行していることがわかる。

(二) 畿内の三尊博仏

敦煌莫高窟二一五号前室の博仏は、如来形坐像を主尊とし、左右に菩薩立像があり、それらを三叉茎蓮華で結ぶという特徴がある。

この三尊形式は、奈良県各地の銅板、押出仏、博仏など飛鳥、白鳳期の壮嚴具に例が多く注目される。例えば法隆寺銅板如来三尊像、当麻寺奥院三尊



第6図 三尊磚仏(中尊倚像)

向って上段左中国唐代造像、右はその裏面の銘文、下左 壺坂寺、右 川原寺裏山

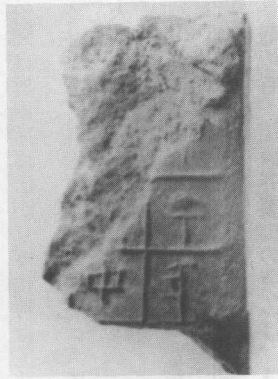
押出仏、知恩院押出仏(第5図)などに類似のものがある。これらは三叉茎蓮華で主尊と脇侍の蓮台を結ぶ形式であるが、主尊は倚像に統一されているのが特徴である。

畿内発見の博仏の三尊形式は、押出仏などと同様に主尊は倚像で統一され、その図像はいっそう個定化されている。蓮台の三叉茎は下部が不明であるが主尊の台座左右から派生して脇侍蓮華台座に連繫されている。

壺坂寺・川原寺裏山などで出土した三尊博仏と同範の如く細部まで似ている「大唐善業泥壓得真如妙化身」の銘をもつ中国の三尊博仏は、長さ一四センチ、幅一二・八センチで、火頭形をなし、中央に定印の倚坐像を置き、独特の倚障がある。後背は宝珠形で、二個の風鐸をさげた天蓋があり、左右の下に大きな唐草文を配置する。脇侍、立像は二者ともに合掌し、主尊台座脇から派生する蓮茎に咲く蓮台に立つ。同じ火頭式三尊博仏に橘寺出土があるが、後背・天蓋などが違い左右の唐草文はない。

唐代三尊博仏の三尊像にはほぼ類似したものに壺坂寺、川原寺裏山の博仏(第6図)がある。主尊は偏袒右肩、定印に住し、宜字座に倚坐する如来である。左右に合掌する脇侍立像は三叉茎蓮華で主尊蓮台に連繫している。倚障は屏風型に広がり、後背は主尊が二重、脇侍は一重の円光(唐代博仏は舟型)である。倚障左右上方から双樹を生やし、花を咲かせている。天蓋には頭に宝珠を飾り、蓋に鈴(風鐸か)七箇を下げている。天蓋の左右には、天空に舞う散華飛天が配置されており、全体は見事な構図で描かれている。博の大きさは、川原寺裏山が縦二二センチ幅一七センチ、壺坂寺が縦二二・八センチ、幅一八・二センチで若干違うが、これは計測の違いか周辺の切断の違いで、内部の文様は印で押したように一致している。二者はおそらく同範とみてよいように思う。

壺坂寺、川原寺裏山の博仏は、ほぼ同じ文様であるが、これに比して唐代三尊仏は後背や唐草文など一部を



第7図 夏見廃寺出土文字
埴

除き三尊仏天蓋など主要なところは全く同じモチーフで製作されている。これらのことから、白鳳時代流行した三尊埴仏は、中国の三尊埴仏の舶載もしくは模造であると見てよい。

壺坂寺、川原寺裏山出土の三尊埴仏に比して、三重県名張市夏見廃寺の埴仏は若干違う点がみられる。全体のモチーフは、前二者と変化はないが、縦二一・三センチ、幅一四・〇センチと若干小さい。

埴の周辺は幅〇・三センチ、表面から〇・一センチの立ち上がりの周壁がある。主尊は如来形定印の倚像で、胸部に卍字を付けるものがある。後背は二重の円光で、火炎による身光がある。後背の外縁には唐草文の変形、C字文をめぐらしている。両脇立像は、合掌して起立し、頭に円光、胸飾りや腰の裳は細かく表現されている。天蓋は最上部を宝珠で飾り、上下を菩薩円光より派生した双樹の花で飾る。天蓋の左右には流麗な天衣をひるがえした散華飛天を配置している。全体は繊細巧緻で、壺坂寺や川原寺裏山出土の三尊仏に比して可成り整備されて華麗な技法で製作されている。夏見廃寺には「甲午年□□中」（第7図）と読める文字埴が出土しており、これをもとに持統天皇朱鳥八年（六九四）製作とすることが妥当とされる。

夏見廃寺には唐代胡人にみえる深眼で高鼻、口髭をつけたガンダラ風の眷族とみる像や、迦楼羅像とみられるものの出土がある。これらを通じて先の壺坂寺、川原寺裏山出土埴仏同様、夏見廃寺の壮嚴具が唐文化の舶載品とみることはできると思う。特に川原寺裏山や、夏見廃寺出土の三尊仏に金箔の残存するものがあり、堂塔壁面を飾る数多くの埴仏に箔をもちいる技法を含めて、当時の日本では製作困難な技術であると思われる。

三尊博仏は一般に多数の独尊仏で飾られた中に安置されるものであることは、中国竜門石窟古陽洞天井部の状況をみれば理解できる。堂塔内部の壮嚴には、三尊仏と独尊仏の両者が必要であり、その様子は壺坂寺などで証明されている。壺坂寺出土の三尊仏主尊と、独尊仏はともに倚坐像であり、いずれも唐代の出土博仏からその源流をたどれるようになったのは今後の研究において重要である。更に、これらの博仏造像の年代が、竜門石窟の造像記、または夏見廃寺の文字博などによって明らかになると、その時代の仏教信仰の背景についての研究が一段と深まることになる。特に竜門石窟には数多くの石像造像に関する題記があり、これとの関係で、彼我の仏教交流について考察することの必要性を深く考えさせられた。わが白鳳期の押出仏、博仏について一部は、ある程度の見極めがついたように思われる。

(三) 博仏の主尊

千仏で壁面を飾り、その一部に龕をもうけて定印の如来や、弥勒を安置する光景は、北魏時代雲岡石窟をはじめ竜門石窟などにしばしばみられる。雲岡第一五窟や竜門千仏洞では、無数の如来像を彫刻し、その中央上段に近いところに小龕があり、中に奈良県壺坂寺、宇佐虚空蔵寺塔趾発見の如来像と同じ倚像をおく。この中で竜門千仏洞では踏割蓮華に両足を置く倚像があった。このような千仏壯嚴は北魏時代に流行し、雲岡一一窟南壁中層、千仏中央の倚坐三尊仏などが注目される。造像に題記のある竜門万仏洞の場合、「大唐監姚神爽造一萬五千尊像記」永隆元年十一月卅日や「唐沙門智運造一萬五千尊像記」があり、万仏洞の千仏の中の龕に「大唐調露二年歲次庚辰七月十五日 奉為瑩師敬造暈功」とあり、倚像如来定印の独尊仏をおく。

さて、この千仏による堂塔壯嚴の様子は、白鳳時代伽藍の博仏による壁面壯飾に影響したことは今日の一般の見解となつているところであるが、この問題について長広敏雄氏は優れた見解をしめしている。長広氏は、千仏造像と弥勒を現わす場面を竜門古陽洞上部彫刻で契合できる、として『法華経』普賢菩薩勸発品（羅汁譯）に注目している。

若有人受讀誦 解其義趣 是人命終 為千仏受手 令不恐怖不隨惡趣 即住兜率天上 弥勒菩薩所 弥勒菩薩有三十二相 大菩薩衆所其圍繞 有百千萬億 天女眷屬而於中生 有如是等功德利益

この箇所を重視して、法華経諸相の彫刻で壯嚴となつた壁面において釈迦、弥勒を仰げば自から「法華経の座」の列にあることを感ずる、としている。千仏に手を授ければ悪趣に落ちず兜率に往生することができる。即ち弥勒浄土の場面を千仏構造であらわしている、と説いたと考える。

長広氏は、この場面を古陽堂に求めたと思われるが、素晴らしい考察力である。博仏をもつて壁面を飾り、中央に倚像を主尊とする三尊仏を配置する白鳳寺院は、釈迦―弥勒の系列、『法華経』再現の場と考へてよからう。

さて、川原寺裏山出土の博仏一六〇点のうち二枚に文字が検出された。一枚の裏には「阿弥陀」²⁰が、他の一枚には「釈、勒」の二字が篋書きされていたのである。この文字については綱干善教氏の論文「三尊博にみる阿弥陀仏の造顯」²¹に詳しいのでそれにゆずるとして、若干の見解を述べてみよう。中国仏教において阿弥陀信仰が釈迦に変わつて広がりを見せるのは、造像題記の豊富な竜門石窟でみる限り、初唐頃からである。したがつて七世紀上半期にはわが国にもその影響があつたものと考えられる。このことについて綱干氏は、舒明天皇

十二年条⁽²²⁾、及び孝徳天皇白雉三年条⁽²³⁾において僧惠隠による無量寿経の講説と議論の記事を注目している。更に持統紀三年条、同六年条に金鋼阿弥陀仏献上の記事をあげ、斉明天皇四、五年に河内観心寺、西淋寺の造像記に阿弥陀仏造像がみえることを指適している。これらによって無量寿経などの講説が行われていたこと、その造像が七世紀中葉には着手されていたことが明らかにされる。この頃から、『法華経』の「千仏に手を受ければ弥勒浄土に往生できる」が『無量寿経』の「功德によって阿弥陀浄土に再生できる」という輪廻往生の悲願が普及されるようになったものと思われる。川原寺裏山出土の三尊仏の主尊は如来定印の倚像であり、弥勒釈迦の造像であるが、「阿弥陀」の文字が刻まれている。一枚の博仏に「釈、勒」の二字を刻むことより阿弥陀の文字のみが刻まれることをもって優位とみることはできないが、ここで綱千氏の「当時の仏教においては像容の未分化をしめしている」とする解釈が納得される。

大分県宇佐市虚空蔵寺塔趾からまとまって独尊倚像の博仏がみつかった。そのうちの一つに「□□光⁽²⁴⁾」の文字があった。二列で右の二字は不明、左一字が「光」と読める。この光字は「無量光仏」の「光」とも判断されるが、そうであれば倚坐独尊(釈迦・弥勒)の像に無量光仏の尊名を付したもので、像容の未分化の状態をしめす好例となる。虚空蔵寺に関連するものと思われるものに、大宝三年(七〇三)僧法蓮の左の記事⁽²⁵⁾(『純日本記』)がある。

施僧法蓮豊前野四十町 褒鑿術也

大宝三年は奈良県壺坂寺建立⁽²⁶⁾の年に一致し同形式の倚像独尊の博仏を出土していることで知られている。その関係からも壺坂寺を含む如来定印の博仏に阿弥陀をあてていた可能性がある。

如来定印に釈迦・弥勒を信仰対象とする中で、ようやく阿弥陀浄土の存在が普及しはじめる事情を埒仏画像と、刻印された文字で検討できることはきわめて興味深い。これには大陸半島の仏教と、遺物に関する研究で更に深まるものと期待する。

おわりに

主として白鳳時代、畿内を中心として発達した押出仏や埴仏が、堂塔の壮嚴に使用されことについて埴仏を中心として考察を加えようとしたが、浅学非才のために問題の核心にふれることができなかつたのは残念である。しかし、白鳳期伽藍堂塔の壁面に金箔に輝く埴仏が、壮嚴されていたことについて長広敏雄氏の深い博学のお陰で洛陽古陽洞の「千仏間に弥勒を現わす場面」(『法華経』)と契合する造像で理解を深めることができた。白鳳期の仏教が、伝統的に釈迦―弥勒信仰に依頼された系譜を、倚像の尊像にみることができ、更に無量寿経を通じて輪廻往生を説く阿弥陀浄土への憧憬について綱干善教氏の川原寺裏山出土「阿弥陀」の鏡書文字の解説で教えられた。その結果、私論として三尊埴仏(大唐善業：「銘文」)各部符合のモチーフにより造像された壺坂寺、川原寺裏山出土の埴仏が唐代中国からの舶載品であつた可能性を指摘することができた。さらに壺坂寺、宇佐虚空蔵寺の独尊倚像も竜門千仏洞の弥勒像造記と弥勒倚像や唐代 仏から同じように舶載の可能性を指摘することができた。

さて、この小論は、一九八〇年七月二一日憧れの敦煌の土を踏み、二一五号窟で三叉莖蓮華に三尊埴仏(日幹

を見学した感動によって博仏の研究がはじまった。八一年には二度目の雲岡石窟え、八二年八月には竜門石窟への研究旅が行われたが、その都度畏友林章先生とは行動をともした。そのたびに、義軌と造像とについて議論し、ある時は深夜に及ぶことがあった。林先生は中国語に詳しく、竜門では造像題記の解説に熱中し、それを通じて多くの学恩をうけた。このことが一番の思い出となり、ここに小論を書いた。願わくば竜門石窟古陽洞天井の千仏とともに弥勒の間に例し、弥勒浄土で永遠の生をうけることを願っている。

終りに本稿には長広敏雄氏の学識を拝し、更に綱干善教氏と関西大学考古館の諸氏、三重県名張市教育委員会の諸氏に心から御礼申し上げたい。本稿には博仏の原流とも考えられる印沙、脱仏、脱塔について譚蟬雪氏の論文を劉永増氏の厚意で掲載できたことあわせて感謝する。

注

- (1) MINISTRY OF CULTURE ARCHAEOLOGY DEPARTMENT, Socialist Republic of the Union of Burma, Rangoon, "PICTORIAL GUIDE TO PAGAN" 1955-1979
- (2) 賀川光夫「敦煌莫高窟二一五号前室の博仏」"MUSEUM"三五八号、一九八一
- (3) 久野健「押出仏と博仏」『日本の美術』一一八号一九七
- (4) 「夏見廃寺」名張市教育委員会 一九八八年
- (5) 綱干善教「川原寺裏山遺跡と出土遺物」『仏教芸術』九号 一九七四年、他
- (6) 水野清一、長広敏雄「雲岡石窟」一九五一—五六、長広敏雄「雲岡と竜門」一九六四、「雲岡石窟」一九七六、その他
- (7) 敦煌文物研究所編『中国石窟敦煌莫高窟』平凡社 一九八〇

- (8) 水野清一、長広敏雄『河南洛陽竜門石窟の研究』同朋舎 一九八〇
- (9) 前注(2)及び(8)に同じ
賀川光夫「宇佐虚空藏寺塔趾発見博仏」『太宰府古文化論叢』下巻、一九八三
- (10) 前注(3)に同じ
- (11) 賀川光夫1、「虚空藏寺址発見博仏」『大分県地方史』一、一九五四、難波田徹「博仏」『宇佐』一九七八、2、「法鏡寺跡・虚空藏寺跡」『大分県文化財調査報告書第二六輯、一九七三、その他
- (12) 亀田孜「勸修寺の釈迦説法図繡帳」『美術研究』第一二九号 一九四三
- (13) 井口喜晴「豊前虚空藏寺出土博仏の系譜」『太宰府古文化論叢』下巻 一九八三
- (14) 前注(3)に同じ
- (15) 水野清一、長広敏雄『河南洛陽竜門石窟の研究』同朋舎、一九八〇
- (16) 前注(3)に同じ
- (17) 前注(3)に同じ
- (18) 久野建「夏見廃寺趾出土の博仏」『東アジアと日本』一九八七 前注(4)と同じ
- (19) 水野清一、長広敏雄、前注(6)と同じ
- (20) 網干善教他、「川原寺裏山遺跡出土品について」『仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第四冊』一九七七
- (21) 網干善教「三尊仏にみる阿弥陀仏の造願」『浄土芸術』第二号 一九七六
- (22) 『日本書紀』卷第二三、「(舒明)五月丁酉朔辛丑、大設齋 因以 請惠隱僧 令説無量寿経」
- (23) 『日本書紀』孝徳天皇白雉三年、「夏四月戊子朔壬寅 請沙門惠隱於内裏 使請無量寿経 以沙門惠資 為論議者 以沙門千人為作聽衆
前注(11)の2と同じ
- (24) 『続日本紀』大宝三年九月条(関連記事に養老五年六月条がある。)
- (25) 『続日本紀』大宝三年九月条(関連記事に養老五年六月条がある。)